

るいそうと、軽度意識低下、頸部腋窩鼠径部リンパ節腫大があり、肝脾腫と腹水が存在した。入院時検査所見：WBC 25,000/mm³, Al-P は正常範囲内, BUN 87 mg/dl, クレアチニンは、4.1 mg/dl, 尿酸は 16.1 mg/dl, 血中 Ca は、7.1 mEq/L, 血中 P は 5.3 mg/dl と著増していた。PTH は正常であり、胸部レ線像では、鎖骨の骨融解像を認めたが、肺野には異常所見は認めなかった。入院後治療により一時、緩解したが、2 週後サイトメガロウィルス感染と白血化を併発し、呼吸不全にて死亡す。

入院時 ^{99m}Tc-MDP による骨シンチ像で、心、肺、胃に異常分布を認めた。約25日後に骨シンチを再施行し、同部位にさらに強い異常分布を認めたが、X 線像で骨融解のある部位には、異常集積はみられなかった。²⁰¹Tl-Cl による心筋シンチでは異常なかった。剖検により、心筋の一部、肺胞壁、胃粘膜固有層、腎尿管に石灰沈着を認めた。

56. 骨シンチにて膝蓋骨に転移を疑わしめた骨原発の悪性リンパ腫の1例

奥野 宏道 高見 勝次 石川 博通
 宋 景泰 松田 昌弘 酒井 健雄
 (日生病院・整形)
 松本 茂一 日高 忠治 中井 俊夫
 (同・放)

右大腿骨大転子部に原発した悪性リンパ腫の症例で、治療経過中の骨シンチにて膝蓋骨部に異常集積を示し、疼痛もあった事より膝蓋骨部への転移を疑って試験切除を行ったが腫瘍組織は全く見られなかった症例を経験したので骨シンチでの異常集積につき検討を加え報告する。症例は、61歳、男性で昭和55年2月より右股疼痛あり、X線では右大腿骨大転子部の骨透明巣が見られ試験切除の結果は悪性リンパ腫であった。X線照射とアドリアンおよびエンドキサンの化学療法を行った。治療後の骨シンチでは右大腿骨大転子部のドーナツ型の異常集積と患側膝蓋骨部に強い集積がみられた。膝蓋骨の単純X線像では溶骨像と硬化像が混在していた。大転子部はドーナツ現象がみられるため集積状態を調べるためと膝蓋骨は転移の有無を調べるため、昭和55年8月両部位の試験切除を行った。ドーナツ型の集積の少ない部位では腫瘍組織や骨性のものはなく、結合織性のもののみであり、周辺のRI集積の高い部位では、新生骨の形成が多くみられた。膝蓋骨部では腫瘍組織は全く見られず、骨梁の

萎縮がところどころにみえ骨破壊と骨新生とが混在していた。昭和56年3月(治療開始約1年位)左股関節痛あり、骨シンチにて異常集積あり転移を疑っていたところ転倒し、左大腿骨頸部骨折をきたし、人工骨頭置換術を行う。術後左鼠径部から腹部にかけての腫瘍増大をきたし、悪液質にて昭和57年1月死の転帰をとった。考察：右膝の疼痛と骨シンチにて強い異常集積が見られた事より、悪性リンパ腫の膝蓋骨への転移を疑ったが、組織検査の結果は、骨梁の萎縮と新生骨の形成が見られるのみで腫瘍組織は全くなかった。骨シンチでの膝蓋骨への異常集積は、病巣が大腿骨大転子部に存在し、大腿四頭筋の萎縮ひいては、それに連続する膝蓋骨の骨萎縮をきたし、それに対する反応性新生骨が骨シンチ集積にもっとも強く関与したと思われる。

57. 骨シンチにおける異所性石灰化のPTX後の変化——慢性腎不全症例——

岡村 光英 沢 久 井上 佑一
 越智 宏暢 小野山靖人 大村 昌弘
 浜田 達雄 (大阪市大・放)

慢性腎不全に伴う二次性副甲状腺機能亢進症で軟部組織に異所性石灰化を来した4例を経験し、副甲状腺腺全摘術前後の変化を単純X線像と骨シンチで観察、比較検討した。

症例1は透析歴8年の48歳男性で両側大腿部に石灰沈着を伴う腫瘍が出現し、次第に増大した。単純X線像にて両側大腿近位部および右臀部に著明な石灰化を認めた。骨シンチにて腫瘍部に一致してRIの異常に強い集積を認めた。

症例2は透析歴6年の45歳男性で単純X線像で左肘関節屈側軟部組織に石灰沈着を認め、骨シンチにて同部にRIの異常集積を認めた。

症例3は透析歴10年の33歳男性で、5年目頃より両足、膝の疼痛、イライラ感、痒痒感が出現した。単純X線像にて左肘関節屈側、両足の軟部に異所性石灰化を認め、二次性副甲状腺機能亢進のもとに、副甲状腺腺全摘術が施行された。単純X線像は術後1か月では同部の石灰化の程度に差は認められなかった。骨シンチでは術前に左肘部、両足の軟部にRIの異常集積を認めたが、術後1か月で明らかにRI集積の減少を認めた。

症例4は透析歴5年の60歳男性で、副甲状腺腺全摘